

イギリス小説と批評の研究

原 英 一

今の時代に、イギリス小説に限らず、文学を研究するということに、研究者が肩身の狭さを感じるとすれば、文明が衰亡期にあることの表れにほかならない。食欲が至上の価値とされ、文学部不要論が堂々と罷り通る時代は、すでに野蛮(ヴァンダリズム)の支配下にある。だからこそ、文学研究には、ゴート族・ヴァンダル族支配下のポエティウスや、モンゴル族に決して膝を屈しなかった文天祥のような気概が求められるのではないか。2016年度もイギリス小説関係の本が、単著、論文集合わせて約30冊、国内で出版された(イギリス小説という枠内に必ずしもおさまらないものも含める)。これらのうち、文明の灯を守ろうとする気概を、野蛮に突きつける挑戦を、内に秘めたものが、どれほどあっただろうか。残念ながら、ひとりよがり、自己満足、謙虚さに欠ける、自分の私的な趣味を押しつけようとする——そういった単著、あるいは目的意識の希薄な、生ぬるい論文集が、相変わらず目立つという印象を受ける。しかし、「スタージョンの法則」によれば、もともと「どんなものでも90パーセントはクズ」なのだ。シオドア・スタージョンは、1950年代から60年代にかけて、文学的香気に満ちたSFを書いたアメリカの作家である。彼はSFに対する当時の世間一般の偏見、蔑視に対して、「主流文学だって、その大部分はただの石ころじゃないか」と指摘したのだ。しかし、主流文学の場合も文学研究の場合も、「石ころ」とされるものの堆積こそが、基盤となり、支柱となっていることを忘れてはならない。その基盤があるからこそ、10パーセントの玉がいつその光輝を放つ。力強く研究を牽引する単著、覚醒された問題意識に支えられた先鋭な論文集は、野蛮の跳梁に抗する文学研究の底力を感じさせるものであり、今後の方向性を示唆するものであった。それらの本を中心に紹介する。まずは単著から。

蛭川久康『評伝ウィリアム・モリス』(平凡社、2016.6)は、実に読みごたえがあった。蛭川氏は1931年生まれだという。ということは、現在86歳。その年齢でこの全500ページ超の大著をものした。驚異的なのは、老齢から来るはずの衰えが全く感じられないこと、よくありがちな老人の繰り言もなければ、視野の狭窄もないことだ。飾り気のない堅固な文体、枯淡というのではなく、力強い筆致で、モリスの生涯が綴られていく。相当な労力と年月を要したことは想像できる。蛭川氏をこの著作に駆り立てたのは、モリスという人間の、汲めども尽きぬ豊饒な魅力であった。建築家であり、画家であり、詩人であり、散文ロマンス作家であり、工芸家であり、出版業者であり、社会主義運動家であったモリス。彼を一言で表そうとすれば、どうなるのか。

回顧と展望

蛭川氏はこう述べる。「モリスは熱く夢を語りつつ、その実現のためにヴィクトリア朝を全力疾走した、百工に通じた稀有な美術手工芸家であった」(p.6)。モリスは、イングランドの風土そのものに、その日常の中にある「小芸術」lesser artsにこそ、美の無限の可能性があると考えた。「小芸術」とは、「大芸術」と比較して「劣る」という意味では、決してない。「われわれの暮らしに身近なところにあつて、われわれの手に触れる一切が、自然と調和して、理に適い、美となる」(p.187)。本書は、モリスが行った多数の講演・演説にもきちんと目配りしている。「補遺IV」の記録によると、モリスの講演・演説は1880年代には一年間に70回、80回以上に及ぶ。驚異的である。社会主義者としての活動の表れなのだが、この間に、アーツ・アンド・クラフツ運動や著作の執筆、染色の研究、ステンドグラスやタペストリ製作、ケルムスコット・プレスの創設準備などが進められていた。モリスが死去したとき、「死因はウィリアム・モリスであったこと。それに一日一八時間の労働」と医師は診断した(p.437)。モリスは「ヴィクトリア朝を全力疾走」で駆け抜けた、はかりしれない価値のある遺産を私たちに遺して。

モダニズム関係で力作が目立った。遠藤不比人『情動とモダニティ——英米文学／精神分析／批評理論』(彩流社、2017.3)は、近年、批評の世界で主要な関心事の一つとなっている「情動」(affect)とモダニズムの関係を、現代批評の言説を縦横に駆使して論じたもの。カズオ・イシグロ論など、深い洞察に富み、「刮目」(遠藤氏が多用する語)させられる。議論に躍動感があり、実に知的刺激に満ちた本だ。ただし、濃密な文章についていくのは、骨が折れる。遠藤氏ほどの知力(そして体力)を持った人間はざらにはいない。凡夫にもやさしく、分かった気にさせてくれるような論述であったら、よりインパクトがあったことだろう。

高村峰生『触れることのモダニティ——ロレンス、スティーグリッツ、ベンヤミン、メルロ＝ポンティ』(以文社、2017.2)は、イリノイ大学に提出された博士論文を日本語化して、大幅な改稿と増補を施したものだという。博士論文を書籍化したものは他にもいくつかあったが、それらと比べると、著者の知的能力の高さは群を抜いている。本書は「触覚」を根幹とするモダニズム論である。「視覚」に比して、「触覚」は、人間らしからぬ、つまり動物的な感覚として、文化・文学の中で排除されてきた。しかし、19世紀後半から「人間」と「動物」の境界線がゆらいで、人間の内なる「動物」が「生の真実として見出されるようになってきた」ことの結果として、モダニズムでは「触覚が重要なものとして浮上して」きて、「真実」と結合した(p.13)。このような洞察は、遠藤不比人氏の「情動」論と通じるものがある。いや、両者はおそらく同じ現象あるいは状況の形を変えた表れなのだろう。著者は「触覚」がモダニストの言説や絵画において、「真実」を追求する手段として、いかに表現されているかを追求していく。イギリスとアメリカ、絵画と写真、批評と哲学、これらの領域を縦横に馳せ巡

イギリス小説と批評の研究

る議論は、モダニズム文化の該博な知識と深い哲学的思索に裏づけられている。

長尾知子『英系カナダ文学研究——ジレンマとゴシックの時空』（彩流社、2016.11）も優れた著作。英系カナダ文学といえば、門外漢にはアトウッドしか思い浮かばない。それも当然で、本書によれば、「カナダ文学は一九二〇年代まで存在を疑われた新興文学」であり、「開花したのは、建国百周年（一九六七）を迎えた一九六〇年代とされる」。日本ではさらに遅く、「カナダ文学研究が緒に就いたのは一九八〇年代である」（「まえがき」）。著者は19世紀初期の植民地時代からのカナダ文学の歴史を辿り、現在に至る系譜を描き出そうとする。「伝統的な読みに立ち戻る」ことはせずに、先行研究を踏まえ、英系カナダ文学に通底するものと想定した「ジレンマ」と「ゴシック」という括りで、作家や作品を捉え直すことを試みている。本書は英系カナダ文学の良質な入門書であり、その2世紀近くに及ぶ壮大な系譜を再構築する独創的な試みでもある。気取りも過剰な気負いもなく、平明に書かれていて、好感が持てる。

なお、英系カナダ文学関係の本としては、藤本陽子（著）、堤稔子・中山多恵子・馬場広信（編）『新カナダ英語文学案内』（彩流社、2017.3）がある。元早稲田大学教授の故藤本陽子氏（2011年没）が遺した論文や書評などを集めたもの。論文の他、書評、新聞のコラム、講演など、さまざまな文章が、堤稔子氏等によって編集され収録されている。藤本氏の研究領域は、カナダ英語文学とはいっても、マイノリティ文学あるいはポストコロニアル文学が中心である。藤本氏が生前に新しいカナダ文学についてのまとまった本を出せなかったことが、いかにも惜しまれる。

カナダ文学関係では、コーラル・アン・ハウエルズ、エヴァ＝マリー・クローラー（編）、日本カナダ文学会（訳）『ケンブリッジ版 カナダ文学史』（彩流社、2016.8）が出た。大判で800ページを超える翻訳書。長く基本文献となるだろう。

廣田園子『ミセス・ダロウエイの永遠の一日——モダニズム・アイコンの転生の系譜』（京都女子大学、2016.10）は、大変面白く読める。文章は平明で、てらいがなく、議論は地道で堅固だ。内容は、『船出』での脇役としての登場から、「ボンド・ストリートのミセス・ダロウエイ」を経て『ミセス・ダロウエイ』に至るクラリッサ・ダロウエイの姿を追い、さらにはポストモダニズムあるいは「メタモダニズム」の作家たちの作品群でのウルフあるいはクラリッサ・ダロウエイの形象／継承を論じていくもの。モダニズムという歴史の一ページを代表する表象であった彼女は、「転生」を繰り返しつつ、その生命を保ち続けている。

渡辺孔二『三人物語——ヴァネッサ・ジョン・ステラ』（スプリング、2016.4）も大変読みやすく、楽しめる。それは、本書は学術書ではなく、著者がいう「物語」として書かれているためである。傘寿を迎える渡辺氏は、余計なしがらみから解き放たれて、書きたいことを自由に書いている。自由な語りといっても、ひとりよがりなのではない。長年にわたるジョナサン（ジョン）・スウィフト研究の蓄積という土台の上に、

回顧と展望

この「物語」が組み上げられ、一次資料を縦横に駆使して語られていることこそが、本書を面白くしている要因だ。ジョン、ヴァネッサ、ステラに関わる様々な資料の間を、重層的なコンテクストに目を配りながら、深く読み込んでいった結果、スウィフトの真の姿が、かなり明瞭に浮かび上がってきたのではないだろうか。

最初にあげた蛭川氏の評伝の他に、ウィリアム・モリス関係でもう一冊、川端康雄『ウィリアム・モリスの遺したもの——デザイン・社会主義・手しごと・文学』（岩波書店、2016.12）が刊行された。これは著者が過去20年以上にわたってあちこちに書いてきた雑多な文章の寄せ集め。書評やら展覧会カタログ所載の解説文やら翻訳書に付けた解題やら。ラスキンに関するものもかなりある。既発表のものがほとんどだから新味は薄い、「大槻憲二とモリス誕生百年祭」と「御木本隆三とラスキン文庫の日々」は、モリスとラスキンが第二次大戦前の日本文化に占めていた重みを再認識させてくれた。

小野俊太郎『ドラキュラの精神史』（彩流社、2016.12）の著者は、『ゴジラの精神史』（彩流社、2014）などを書いている「文芸・文化評論家」だそうである。この本も、学術書ではなく、一般向け、とくにドラキュラ・ファンのためのものと見ればいだろう。内容は、「精神史」（それが何を意味するにせよ）ではなく、『ドラキュラ』のあらゆる面についての詳細な解説。小野氏は『未来を覗くH・G・ウェルズ——ディストピアの現代はいつ始まったか』（勉誠出版、2016.7）も出版した。「ここでの中心はあくまでも作品を通してのウェルズを知ることにある」（pp.5-6）というが、中身は作品解説であって、「作品を通してのウェルズ」ではないし、副題の問いに対する答えも見当たらない。

福永信哲『ジョージ・エリオットの後期小説を読む——キリスト教と科学の葛藤』（英宝社、2016.8）では、「後期小説を読む」というタイトルでありながら、「序章」のエリオット評伝が90ページにもわたって、延々と続く。浅井雅志『持続するエピファニー——文学に表象されたエロティシズムと霊性』（松柏社、2016.5）は、ロレンスを中心に、「霊的探求」というべきもの。梅正行『絨毯とトランスプランテーション——二十一世紀のV. S. ナイポール』（音羽書房鶴見書店、2017.2）の内容は、ナイポールが21世紀になってから発表した著作の詳細な紹介。鴨川啓信『グレアム・グリーン』の小説と物語の繰り返し』（英宝社、2016.3）は、大阪大学に提出された学位論文をもとにしたもの。矢野奈々『ダーク・ヒロイン——ジョージ・エリオットと新しい女性像』（彩流社、2017.3）もまた、博士論文（白百合女子大）を加筆修正したもの。他に、松村敏彦『ジョウゼフ・コンラッドの比較文学的世界——村上春樹・宮崎駿・小泉八雲・C. ディケンズ・H. ジェイムズ・O. パムク』（大阪教育図書、2016.12）がある。

次に論文集を紹介する。

日本ヴァージニア・ウルフ協会（編）『終わらないフェミニズム——「働く」女たち

の言葉と欲望』(研究社, 2016.8)は, 名目的には, ウルフを中心に論じられるフェミニズム論集だが, 実質的にはカルチュラル・スタディーズ論集である。「終わらないフェミニズム」とは何か, 河野真太郎氏の「はじめに」に詳しい説明がある。河野氏によれば, フェミニズムの観点から見ると, 現代は「第二波フェミニズムがグローバル化した資本主義に取り込まれてしまった」ポストフェミニズムと言うべき状況であり, それを乗り越える新しいフェミニズムが求められている。「第二波フェミニズムは残滓的なあり方で現在のポストフェミニズム状況を構成しており, 私たちはそれに新たな生命を吹きこまなければならない」(p.vii)。この意気込みのもと, 第I部「ポストサフラジストの「自由」と消費文化」, 第II部「変貌する家庭とケア労働」, 第III部「ポストフェミニズム状況下の労働と共通文化」, 第IV部「旅するフェミニズム」という構成で, 11本の論文が収められている。その他, 「論ずべき, 論じうるほかの論点を提示するため」(p.xiii)の「コラム」が10本。全体としては, 一定の水準が保たれている。

田中孝信, 要田圭治, 原田範行(編)『セクシュアリティとヴィクトリア朝文化』(彩流社, 2016.12)は, 堅実な内容である。田中孝信氏による「序章 横溢するセクシュアリティ」は, 実によく目配りがきいたイントロダクション。セクシュアリティがヴィクトリア朝を通じてどのように表現され, 問題化されていったか, 簡潔にまとめられている。本書全体についていえることだが, うんざりするほどの「ヴィクトリア朝のセクシュアリティ」論が溢れている状況下, この論文集をあえてまとめたことについて, もっと積極的な弁明あるいは挑発の言葉があつてほしかった。収録されている論文では, 閑田朋子氏による「「不適切な」議題と急進派女性ジャーナリスト, イライザ・ミーティヤード——一八四七年スプーナー法案(誘惑・売春取引抑制法案)の行方」が出色。編者3名の論文はそれぞれ手堅い。他は, 論文集だからいたしかたないが, 古めかしかったり, 既知のことをまるで新しいことであるかの如く論じたり, といったものが目立つのが残念。

結城英雄・夏目康子(編)『アイリッシュ・アメリカンの文化を読む』(水声社, 2016.6)は, 内容的にはアメリカ文学の方で取り上げるべきなのかもしれないが, もちろんイギリスとも深い関わりがある。アイリッシュ・アメリカンは, アイルランド本国の十倍近い, 四千万人もいるという。ところが, これまで注目を集めることがほとんどなかった。本書は, 「これまでの一般的なアメリカ文化論の空白部」であった彼らに焦点を当てたもの。結城英雄氏の「序論」で, 目を開かせられたのは, 『ハックルベリー・フィン』の主人公がアイルランドとつながっているという指摘だ。確かに, 「フィン」という名前は, アイルランドのアイデンティティそのものといってもいい。これまで意識しなかったのは実に迂闊だった。

金井嘉彦・道木一弘(編)『ジョイスの迷宮——『若き日の芸術家の肖像』に嵌る方

回顧と展望

法』(言叢社, 2016.12)は、昨年度刊行された金井嘉彦・吉川信(編)『ジョイスの罨——『ダブリナーズ』に嵌る方法』(言叢社, 2016.2)に続くもの。精力的な研究遂行には驚かされる。前書と比べると玉石まじりが強まった印象だが、依然として全体の質は高い。次は必然的に『ユリシーズ』か。ただ、『ダブリナーズ』でも感じたことだが、根本的疑問がある。これだけのレベルなのだから、英語による論文集とすべきではなかったか。

江藤秀一(編)『帝国と文化——シェイクスピアからアントニオ・ネグリまで』(春風社, 2016.9)は、筑波大学人文社会系リサーチ・グループのひとつ「帝国と文化」の研究者が中心となった論文集。「近代西ヨーロッパの海洋帝国——特に大英帝国をモデルとした本国とそれが所有していた植民地とのあいだの関係を問い直そうとする試み」とのこと。コロナリズムはいまさら取り上げるべきテーマなのだろうか、首をかしげる。事実上、江藤秀一氏の退職記念論文集である。

木村正俊(編)『文学都市ダブリン——ゆかりの文学者たち』(春風社)は、『文学都市エディンバラ——ゆかりの文学者たち』(あるば書房, 2009)の姉妹編。スウィフト、ワイルド、ジョイス等から、主要な現代作家たちまでを網羅する18章からなる。原田範行、岩田美喜、宮崎かすみ、中尾まさみといった実力のある人たちが担当した章は、いずれもそれなりに読ませてくれる。

エリザベス・ボウエン研究会(編)『エリザベス・ボウエンを読む』(音羽書房鶴見書店, 2016.8)は序章、長編小説10編を論じる第一部、ノンフィクションと短編を論じる第二部、「ボウエンに関わる他のテーマ」を論じる第三部から成る。太田良子氏による序章「エリザベス・ボウエンの二十世紀」は、アイルランド出身のボウエンの生涯を要領よくまとめている。

東雅夫・下楠昌哉(編)『幻想と怪奇の英文学Ⅱ——増殖進化編』(春風社, 2016.8)は、2014年に出版された『幻想と怪奇の英文学』の続編。19篇の論文と翻訳が収められている。前書の12篇から大幅増加、総ページ数も470を越える。タイトルには「英文学」が残っているが、執筆者はイギリス・アイルランド文学研究者の他に、日本近代文学やアメリカ文学の研究者が加わっている。「幻想と怪奇」というテーマには、かつてはわくわくさせられたものだった。しかし、このように雑多な寄せ集めになって水ぶくれし、しかもけっこう大真面目な論文集になっていると、興ざめしてしまう。ここにはダンセイニもラヴクラフトもスティーヴン・キングもない。

井川ちとせ・中山徹(編)『個人的なことと政治的なこと——ジェンダーとアイデンティティの力学』(彩流社, 2017.3)は、一橋大学リレー講義「ジェンダーから世界を読む」の書籍化第4弾だとのこと。第二波フェミニズムの象徴的スローガンともなったキャロル・ハニシュのエッセイのタイトル「個人的なことは政治的なこと」を本書のタイトルに流用している。ハニシュのエッセイは巻末に翻訳掲載。十九世紀英文学

イギリス小説と批評の研究

研究会(編)『『はるか群衆を離れて』についての10章』(音羽書房鶴見書店, 2017.1)は、この研究会によるハーディの小説についてのシリーズものの一つ。津久井良充・市川薫(編)『架空の国に起きる不思議な戦争——戦場の傷とともに生きる兵士たち』(開文社出版, 2017.3)の書名は、編者の津久井氏の『ノストローモ』論のタイトル「奇怪な内乱の起きる不思議な国」の言い換えか。英米文化学会(編)『英米文学にみる検閲と発禁』(彩流社, 2016.7)は、英米文化学会の「発禁問題研究分科会」の九年に及ぶ研究活動の成果だそうだ。他に、文学と評論社(編)『超自然——英米文学の視点から』(英宝社, 2016.6)がある。

(東京女子大学特任教授)